

だいじなことはみんな 子どもから教わった

岩上 節子

幼稚園の先生になって五度目の夏を迎えます。そのうちの三回をともに過ごした子ども達、三歳、四歳、五歳とはじめて三年間受け持った子ども達に、なつかしさと、感謝の気持ちを込めて、

暑中お見舞い申し上げます

小学校に入って最初の夏休みが、楽しいものとなりますように

今この幼稚園で、はじめて受け持った三歳児クラス。はじめての四歳児クラス。そして、五歳児クラス。何もかもはじめてだから、一生懸命考えてやってみても、思いつくことなどたかが知れていて、毎日毎日、予想外のことばかり。自分の手に負えないような出来事ばかり起ります。せめて、先輩の先生方のやる通り、言う通りにやってみようと思いいきません。要するに、失敗の連続。打ち合わせにしても、国語上は理解しているのに、何故か見当違

いの動きをして、自分もまわりもとまどいます。

『英語の教科書は読めますが、英会話はできません』の保育ページョンといったところです。

しかしまあ、こうして書いてみると、我ながら、よくも辞めないで続けてきたものだ……。

バルセロナオリンピックの後の五歳児二期始業式。「先生、岩崎恭子ちゃんが金メダルとったんだよね！」と時代に敏感な我がクラス。当然のごとく、三期始業式の話は、『皇太子様と雅子さんの御婚約』でした。「婚約したんだよね」「よかったね」「先生はしないの？」の声の中、「さて、ここで問題です。皇太子様のお名前は何でしょう？」とふざけて聞いてみると……、S君が自信満々で答えました。「知ってる！ ブッシュ大統領!!」「!?」私、思わずうけてしまったのですが、さらにH君が「ちがうよ。皇太子様だよ！」とたたみかけてくるので、ますます笑いが止まらなくなって困ってしまい

ました。結局、Rちゃんが、「浩宮さま?」と言ったところで、皆「ふーん」と落ち着いたのですが、一見わかったようなことを言う子ども達も、聞いたことをそのまま話しているだけで、本当に理解しているかどうかは、いつも『?』マークなのでしょうね。

あれ!? それは私も同じような……!?

四歳児クラスを担任している時のこと。園庭で落ち葉焚きをして、やきいもを食べようということになりました。丸太を組んで、何日もかけて集めた落ち葉を燃やして、灰の中にさつまいもをほうりこんで、後は出来上がるのを待つばかり……。ところが、なかなか出来上がりません。打ち合わせでは、お弁当の前に食べられるはずだったのに、急遽、先にお弁当の用意をすることになりました。状況にあわせて、臨機応変に判断した。ただそれだけのことでした。でも、その時の私にとっては、たったそれ

だけのことが、実にはたいしたことだったのです。

何しろ、園全体で『お弁当の前に食べる』と打ち合わせた以上は、必ずやきいもを食べてからお弁当の支度になるはずだと思いついでいるので、それ以外の選択肢が自分の中ありません。普段ならば、遊びも一段落して、「先生、おなかですいてきたね」と子ども達がい出す頃になっても、一生懸命遊びを盛り上げていたのです。しかも、「もうすぐやきいもが食べられるわね。楽しみね。」と、子ども達の期待感も煽るだけ煽っていたものですから、今さら「先にお弁当に……」と言われても、自分が方向転換できないのです。それでも何とか気をとり直して、「片付けて、先にお弁当にしましょう」と声をかけ始めるのですが、今の今まで言っていたことと180度違うことを急に言いつ出すのです。子ども達だって反応しきれません。実際にお弁当を食べ始めるまでには、途方もなく時間がかかりました。

結局、お弁当を食べ始めてすぐに、やきいもは出

来上がり、子ども達は大喜びでやきいもとお弁当を食べたのですが、私は一人素直に喜べません。「この子ども達にとって、幼稚園で、こんなに大きな落ち葉焚きをして、その場で皆でやきいもを食べるなんてことは、とても楽しみなこと、絶対に、もっとゆつたりとした雰囲気の中で経験してほしいかっただのに……。こんなにバタバタと落ち着きなく動きまわるつもりなかったのに……。どうして心おだやかに対応できないのだろう……。融通がきかないのかしら……。」などと考え始めると、その場で気分が滅入ってきます。実際には、子ども達は自分自身の力で、その経験を受け止めているのに、自分の理想通りに事が運ばなかったという、私自身の自分勝手な挫折感に心をうばわれているのです。しかも、そんな事ばかり考えて、しかめっ面で子ども達の前にいる自分がいよいよ不愉快に思われて、どうしようもない気分になってしまいます。仕方なく、トイレの個室にこもること三分間。何とか気を落ち着け

て保育室にもどりました。

保育室では、子ども達が「先生、お弁当食べないの?」「どこに行ってきたの?」と聞いてきます。

「お手洗いに行ってきたの」「先生、目、まっ赤」

「うん、煙たかったわね。今日……」などというやりとりのなかで、Fちゃんが、「先生、ここ座んなよ」と声をかけてきました。「ここ空いているよ」

「座ったら……」と他の子達もさそってくれます。

「ありがとう」とその席に座りながら、私は内心驚いていました。今まで生きてきて、こんな風にやさしくていたわりに満ちた言葉を私は、誰かにかけてことがあったっけ!?

いつもは、うるさいくらいに「先生、ここ座って!」「こっち来て!」と言う子ども達なのに、どうして、その日に限って「ここ座んなよ」だったのでしょうか。理由は、今でもわかりませんし、もしかしたら、たいした意味があつて言った言葉ではないのかもしれない。でも、その時の私にとって、

一番必要で、しかも、心に染み入るような暖かさを持っていたのは、まさにその一言だったのです。

私達は、同じ国の人間で、日本語という同じ言葉を使って、コミュニケーションをとっています。けれども、その使い方は、十人十色それぞれで、決して同じではありません。○○なつもりで言った言葉が、××に聞えることが沢山あるのです。相手のためを思い、助けになりたいと思っていてさえも、よかれと思ひ発した言葉が裏目に出してしまうことの方が多いのが現実です。大人になるにしたがつて、「どうすれば、相手に上手く伝わるだろうか」「こういう言い方をしたら、どう思われるだろうか」ということに、心を砕くようになります。おそらくそれは、人として、大切な成長のひとつでしょう。しかし、時にそれは、技術的な面にばかり片寄つて、「何のために」という発信源が見失われてしまうことがあるのではないのでしょうか。少なくとも私は、

時に見失ってしまうのです。

まだ、ひとつひとつの言葉を理解して、使いこなしていない子ども達です。ふと口をついて出た言葉がどんな意味を持つのかは、本人も把握していません。しかし、だからこそ、何気ない一言が、その人自身を実感させて、ひどく心をゆらすのです。そして、まだ生まれて五年程度の人間が、ほとんど無意識的に、自分の何倍も生きている人間を励ましてしまうことの不思議さを思う時、自分の中の『上手くやってやろう』的な気負いが消えていくのです。

大事なものは、子どもがちゃんと持っていて、大人は宝探しをしているみたい。宝物が沢山みつければたら、きっと、子どもも大人もうれしいだろうな、と思います。

この三年間は、私にとって、とても貴重なものでした。自分の中の嫌なところを、素直に認められるようになってきました。「さっきはごめんなさい」

と言えるようになったのは、むしろ、私の方でした。そのうち、普通に話している自分の言葉が、誰かをいたわり得るような、包みこめるようなやさしさを持つように変わっていったらいいなあ……と
思っています。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

